２０１６年8月１４日　日本基督教団 東村山教会 主日礼拝　　説教者：田村毅朗

聖書箇所：旧約 イザヤ書 第１４章１２節～１５節、新約 ルカによる福音書 第１０章１３節～１６節

説教題：「裁きの時には」

讃美歌：５４６、６８、２５２、３５８、５３９、Ⅱ－１６７

　主イエスは、１２人の他に７２人を任命し、御自分が行くつもりのすべての町や村に二人ずつ先に遣わされました。主は、彼らに命じました。「どこかの家に入ったら、まず、『この家に平和があるように』と言いなさい。また、『神の国はあなたがたに近づいた』と言いなさい。そして、あなたがたを受け入れない町があれば『しかし、神の国が近づいたことを知れ』と言いなさい。その上で主は、厳しい言葉を加えたのです。「言っておくが、かの日には、その町よりまだソドムの方（ほう）が軽い罰で済む」。

　ソドムとは、創世記に登場する異邦人の町で、暴虐が満ちていました。神は、ソドムの実態を調べた上で、暴虐の罪が事実なら、町を滅ぼす決意をされたのです。そこで、アブラハムは神の御前に進み出て、直訴しました。「まことにあなたは、正しい者を悪い者と一緒に滅ぼされるのですか。あの町に正しい者が５０人いるとしても、それでも滅ぼし、その５０人の正しい者のために、町をお赦しにはならないのですか。正しい者を悪い者と一緒に殺し、正しい者を悪い者と同じ目に遭わせるようなことを、あなたがなさるはずはございません。全くありえないことです。全世界を裁くお方は、正義を行われるべきではありませんか（１８：２３～２５）」。神は、アブラハムに言われました。「もしソドムの町に正しい者が５０人いるならば、その者たちのために、町全部を赦そう（１８：２６）」。

　神の赦しとは、悪の状態を「まあいいよ」と放置することではありません。むしろ、罪人が悔い改めるまで忍耐して待ち続ける、それこそが神の赦しです。アブラハムは、それから「４０人しかいないかもしれません」、「３０人しかいないかも」、「２０人しかいないかも」と粘り、ついに最後「主よ、どうかお怒りにならずに、もう一度だけ言わせてください。もしかすると、１０人しかいないかもしれません」と言い、「その１０人のためにわたしは滅ぼさない」という「神の赦し」を引き出すことに成功したのです。しかし、私たちの罪の現実ですが、ソドムには１０人すら正しい者がいなかったのです。その結果、ソドムとゴモラ、および低地の町々は神に滅ぼされてしまいました。

主イエスは続けます。「コラジン、お前は不幸だ。ベトサイダ、お前は不幸だ。お前たちのところでなされた奇跡がティルスやシドンで行われていれば、これらの町はとうの昔に粗布をまとい、灰の中に座って悔い改めたにちがいない。しかし、裁きの時には、お前たちよりまだティルスやシドンの方（ほう）が軽い罰で済む。また、カファルナウム、お前は、天にまで上げられるとでも思っているのか。陰府にまで落とされるのだ（ルカ１０：１３～１５）」。

　コラジン、ベトサイダ、そしてカファルナウムはガリラヤ湖周辺のユダヤ人の町です。一方、ティルスやシドンは地中海沿岸の港町で、異邦人の町です。旧約聖書アモス書には、「ティルスの三つの罪、四つの罪のゆえに／わたしは決して赦さない（アモス１：９）」とあります。しかし、そのような異邦人の町でさえ、主の奇跡が行われれば「とうの昔に粗布をまとい、灰の中に座って悔い改めたにちがいない」、よって最後の裁きの時にはコラジンやベトサイダより「軽い罰で済む」と主はおっしゃるのです。

コラジンとベトサイダは、主イエスの力ある業を見ても回心しませんでした。このような場合、神の裁きは厳しくなります。神の奇跡を知りながら、奇跡を無視するなら、神は無視した者の責任を追及し、厳しい裁きを下される。その結果、かつては、預言者たちによって厳しく非難されたほど偶像礼拝と不道徳に陥っていた異教徒の町ティルスとシドンは、堕落していた

にもかかわらず、裁きの時には、コラジンとベトサイダの人々より、軽い罰で済む。それほど、主イエスの力ある業を見ても回心しない者には、重い罰が与えられるのです。
さらに主イエスは、カファルナウムに対し、「陰府（よみ）にまで落とされるのだ」と厳しく審かれます。カファルナウムは、主イエスのホームタウンです。主は、カファルナウムで精力的に働きました。しかし、この町も主イエスの業を見ても回心しなかった。その結果「陰府（よみ）にまで落とされる」のです。
ルカ福音書と共に朗読して頂いたイザヤ書第１４章にも、「お前は陰府（よみ）に落とされた／墓穴の底に（１４：１５）」と書いてあるように、元々は異邦人であるバビロンの王に対する預言者イザヤの言葉です。「隠府（よみ）」とは、一般的には、「死者が一定期間のみとどまるにすぎない場所」を意味しますが、ここでは「地獄」と同じ意味で用いられているようです。主の裁きは、ユダヤ人も異邦人も共通です。つまり、主イエスにとって、ユダヤ人であるか異邦人であるかは重要ではなくて、私たちが心から回心するか、あるいは主の招きを無視するかが決定的に重要なのです。
　主は、７２人を激励するべく最後に語ります。「あなたがたに耳を傾ける者は、わたしに耳を傾け、あなたがたを拒む者は、わたしを拒むのである。わたしを拒む者は、わたしを遣わされた方を拒むのである」。
　７２人が心を込めて、「悔い改めれば、あなたも救われる」と伝道しても、「私は悪いことはしていない」と拒絶されるケースがほとんどだったはずです。だからこそ、主はおっしゃる。「７２人による悔い改めを促す言葉を拒絶する者は、７２人を拒絶するのではなく、７２人を遣わされた主イエスを拒絶するのであり、さらに主イエスを遣わされた神を拒絶するのである」と。その結果、「かの日には、その町よりまだソドムの方が軽い罰で済む（１０：１２）」と主イエスが言わざるを得ないほど厳しい罰を受けることになるのです。
７２人を通して、私たちに与えられた主のメッセージは、溢れる恵みを知りつつ、その恵みは神から与えられた恵みと感謝することなく、自分の力で獲得したと思いあがり、「自分は、天にまで上げられて当然」と驕り高ぶる者の罪を、主が厳しく裁かれることを示しています。
　ルカ福音書において、「悔い改め」は大切な言葉です。第１５章に入ると、「見失った羊」、「無くした銀貨」、そして「放蕩息子」の譬えが登場します。それらのテーマは、まさに「悔い改め」です。主イエスは、「悔い改める１人の罪人については、悔い改める必要のない９９人の正しい人についてよりも大きな喜びが天にある（１５：７）」と話され、「１人の罪人が悔い改めれば、神の天使たちの間に喜びがある（１５：１０）」と言われました。実際、放蕩息子が父親のもとに帰った時、父親は「この息子は、死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかった（１５：２４）」と大いに喜んだのです。
主イエスこそ、罪人が悔い改め、神に立ち返ることを、大いに喜ばれます。つまり、ユダヤ人として生まれた主が、ユダヤ人の救いのために伝道しておられることは確かです。同時に主は、異邦人も含めた世界の人々の救いのために、多くの弟子たちを各地に派遣して伝道しておられるのです。しかし、「私たちの先祖にはアブラハムがいる」と血筋を誇り、「律法を与えられた私たちこそ神の民であり、律法を守っているが故に正しい人間である」と自負するユダヤ人は、主イエスの力ある業を見ても回心しない。しかも、ユダヤの血筋として当然「天にまで上げられると」安心しきっている。そういう人々の代表として、コラジン、ベトサイダ、カファルナウムという町の名が登場しているのです。
　主イエスは、それらの町の人々を「不幸だ」と言って嘆かれました。「不幸」と訳された原語は、ギリシア語で「ウーアイ」という言葉です。「ウーアイ」という響きそのものが、主の深い嘆き「ああ、何と悲しいかな」を表しているように聞こえます。「ウーアイ（不幸だ）」は、私たちが回心する日を今か今かと待ち続ける主イエスの心からの嘆きです。
　神も本当はソドムを滅ぼしたくなかった。だからこそ、ソドムに「正しい人」が十人いればソドムは滅ぼされず、赦された

はずでした。しかし、ソドムには正しい人が１０人いなかったのです。どういうことか？１０人どころか、１人も正しい人はいなかった。つまり、私たちがどんなに努力しても、自分たちの正しさによって神から赦されることはないのです。その意味では、地上に生かされている私たちが、神の厳しい裁きにあうことは避けられない。だからこそ、父なる神は御子主イエス・キリストをこの世に遣わして下さったのです。ただ一人、主イエスだけが「正しい人」として十字架で死に、三日目に復活し、天にまで上げられた。そして今、この瞬間も神の右に座し、弱さを抱えている私たちのために真剣に執り成しの祈りを献げておられるのです。この世で唯一の「正しい人」の犠牲の故に、神様は私たちの罪を赦し続けて下さるのです。

スイスの宗教改革者カルヴァンは、ジュネーブ教会信仰問答の中でこう問うています。問８７「それゆえ、われわれは、最後の審判を、恐れおののくべきではありません」。答「まったくです。われわれの出頭すべき審判者は、われわれの弁護人であり、われわれの訴訟を弁護するために引き受けて下さった、そのお方以外ではないのでありますから」。またハイデルベルク信仰問答は、このように問う。問５２「『生ける者と死ねる者とを審（さば）』かれるためのキリストの再臨は、あなたをどのように慰めるのですか」。答「わたしがあらゆる悲しみや迫害の中でも頭（あたま）を上げて、かつてわたしのために神の裁きに自らを差し出し／すべての呪いをわたしから取り去ってくださった、まさにその裁き主（ぬし）が天から来られることを／待ち望むように、です。この方は、御自分とわたしの敵を／ことごとく永遠の刑罰に投げ込まれる一方、わたしを、すべての選ばれた者たちと共にその御許（みもと）へ、すなわち天の喜びと栄光の中へと迎え入れてくださるのです」。

天からの審判者、天からの裁き主がこうした審判者、裁き主であるがゆえに、私たちキリスト者は、裁きの時にも、何も恐れることなく、頭を高く上げて、再臨の主イエス・キリストを安心してお迎えすることができるのです。

８月、今年も私たちが犯してしまった戦争の過ちを悔い改め、平和を祈る月を迎えました。争いは過去のことではありません。世界規模の争いのみならず、私たちの家庭、またキリスト者の群れにも様々な争いがある。その事実を否定することは出来ません。だからこそ、私たちは本来であれば、厳しく裁かれる。しかし、主イエスを救い主と信じ、信仰を告白し、洗礼を受けた私たちは主の裁きを、恐れおののくべきではないのです。最後の審判の日、再臨された主は、あのゴルゴタの丘で、全世界の救いのために神の裁きを自分の身に引き受け、十字架の上で処刑され、陰府（よみ）にまで下られたのです。そのような主の赦しと愛を知った私たちは もう不幸ではありません。たとえ、この世で厳しい試練に襲われても、過去に犯してしまった罪にさいなまれても、もう落ち込むことはない。頭を高く上げ、主を仰ぎ、高らかに主を賛美することが許されているのです。

讃美歌第２編の１番「こころを高くあげよう」の４節では、このように主を賛美します。「おわりの日がきたなら、さばきの座をみあげて、わがちからのかぎりに、こころを高くあげよう」。今週も、高らかに十字架と復活、そして再臨の主イエスを賛美し続けたい。心から願うものであります。

（お祈りを致します）

御在天の主イエス・キリストの父なる神様、今朝も私たちの名を親しく呼んで下さり、主の日の礼拝にお招き下さり、心より感謝を申し上げます。私たちは一人の例外もなく、あなた様の計画しておられる「時」に召されます。そして、一人の例外もなく裁かれます。けれども、そのときこそ、裁きの座を見上げて、我が力の限りに、心を高く上げることが許されている恵みを今、心より感謝を申し上げます。どうか、裁きの時の恵みを固く信じ、日々、あなた様の御前に悔い改めつつ、主を高らかに賛美し続けることが出来ますようお導き下さい。今、私たちの世には様々な争いが存在しております。何よりも、私たちは自ら犯してしまった罪を責め続けます。けれども、私たちが既に犯し、今も犯し、そしてこれからも犯す罪を御子が十字架で裁かれたことで全て赦して下さった、この驚くべき恵みを本当に心から感謝を申し上げます。どうか、罪赦された者として、大胆にまた喜びを持って、御子の十字架と復活、そして再臨の恵みを語り続けることが出来ますようお導き下さい。これらの

貧しき願いと感謝とを、私たちの救い主、主イエス・キリストの御名によって御前にお献げ致します。アーメン。

（執り成しと主の祈り）→共に祈りましょう。

御在天の主イエス・キリストの父なる御神、私たちは聖霊の助けを頂かなければ、主の御心を生きることはできません。どうか今週も、私たちに聖霊を注ぎ続けて下さい。平和を覚える８月を迎えております。８月６日は広島、９日は長崎への原爆投下、明日１５日は終戦の日を迎えます。しかし、今も核実験は終わらず、福島での原発事故も収束せず、それにもかかわらず、原発再稼働の動きは止まりません。また、戦争が終わるどころか、戦後７１年を迎えても、全世界で様々な争いが続いております。今、心から悔い改めの祈りを献げます。どうか、全国、全世界で今も流されている悲しみの涙、嘆きの涙を真の平和の造り主であられるあなた様が拭って下さい。お願い致します。私たちも人間の弱さ、罪に諦めることなく、どのような試練に襲われても、主の十字架と復活、そして再臨の希望を抱きつつ、「み国を来たらせたまえ」と祈り続ける者として導いて下さい。Ｔ神学生の半田教会での夏期伝道実習も今日を入れて、あと９日となりました。今夜は、奥田センターでの夕礼拝の説教奉仕が控えております。どうか、Ｔ神学生の夏期伝道実習を最後までお導き下さい。日本でも、オリンピック報道一色となっておりますが、今日は、４月１４日の夜に熊本県を中心に最大震度７の揺れが襲った熊本地震から４カ月です。１８万人を超えた避難者も、仮設住宅への入居等が進み、ピーク時の約１％１８００人まで減りました。それでも今も１８００人もの方が避難生活を余儀なくされております。どうか、私たちもそれらの方々の痛みを忘れず、全国各地の被災地を覚えて祈り続けることが出来ますようお導き下さい。今朝も病のため、夏の暑さのため、この世の様々な理由のため、どうしても主の日の礼拝に通うことの出来ない兄弟姉妹が大勢おられます。どうか、それらの方々の上に、私たちと等しい祝福をお与え下さい。

キュリエ・エレイゾン 主よ 憐れみたまえ。天にまします我らの父よ、願わくは み名をあがめさせたまえ。み国を来たらせたまえ。み心の天になるごとく、地にもなさせたまえ。我らの日用の糧を今日も与えたまえ。我らに罪をおかす者を我らがゆるすごとく、我らの罪をもゆるしたまえ。我らを試みにあわせず、悪より救い出したまえ。国と力と栄とは、限りなく汝のものなればなり。アーメン